

令和4年度 佐倉市地域ケア推進会議

会議要旨

1. 日 時 令和5年2月10日（金）13:30～15:30

2. 方 法 集合形式

3. 場 所 健康管理センター 2階 予防接種室

4. 出席者（順不同）

ユーカリが丘地区社会福祉協議会代表

志津南地区社会福祉協議会代表

西志津地区社会福祉協議会会長

臼井地区社会福祉協議会会長

王子台地区社会福祉協議会会長

和田地区社会福祉協議会事務局長

弥富地区社会福祉協議会会長

千成ふれあいサロン/千成ふれあいサービス代表

けやきくらぶ代表

佐倉市高齢者福祉・介護計画懇話会委員代表

佐倉市社会福祉協議会 地域共生推進班班長

志津北部地域包括支援センター

志津南部地域包括支援センター

臼井・千代田地域包括支援センター

佐倉地域包括支援センター

南部地域包括支援センター

<事務局>

佐倉市高齢者福祉課

5. 議 題 地域の支えあい活動の活性化・担い手不足について

6. 議事概要

(1) 各圏域の現状について

①志津北部圏域

- ・地区社協の支え合いサービスについて、コロナ禍で控えていた家の中に入って行うサービスが再開できた。
- ・ふれあい福祉祭りが3年ぶりに開催された。
- ・地域の集いの場では、コロナ禍で活動を休止していた団体も多くが再開できた。しかし、参加者の中には転倒等を理由に介護保険サービスに移行している方もおり、集いの場まで自力で通うことが難しくなってきた方が目立つ。
- ・活動を続けている団体は、感染予防に対して意識が高い。
- ・徘徊高齢者の声掛け訓練を2か所で行い、支え合いに関して地域の方の意識が向上した。
- ・わくわく体操会がコロナ禍であったが、1団体立ち上がった。

②志津南部圏域

- ・地区社協の支え合いサービスについては、草取りや日常生活に密着したサービス内容が多く、70～80%である。
- ・高齢のサポーターが多く、夏場の草取り等は体力的に大変であるため、時期を調整して対応している。
- ・集いの場に関しては、平均年齢は高いが皆さん元気に参加されている。

③臼井・千代田圏域

- ・コロナ禍で一時的に中止している活動や団体が多かったが、現在は徐々に再開されてきている。
- ・圏域内には代表的な支え合いサービスが4つあり、どの団体も工夫して屋内作業は時間を短く、人員を増やしたり、利用者アンケートを実施したり、状況に合わせて常に動き続けている。
- ・地区社協の支え合いサービスでは、LINEを活用して仲間同士で助け合い、情報共有している団体もある。
- ・地区社協で開催している3世代交流グランドゴルフ大会は、現在は感染予防のため成人のみを対象に開催している。

④佐倉圏域

- ・佐倉圏域ではサービスとして支え合い活動を実施している団体は2か所。
- ・体操の場や集いの場などを通して、参加者同士がさり気なく気を使っている。
- ・婦人会をベースに立ち上がったわくわく体操会もある。

⑤南部（根郷・和田・弥富）圏域

- ・地域性が3地区とも異なるため、課題も様々。
- ・近所同士の交流が希薄な地域は、支え合いサービスに依頼が多く、反対に昔からの顔馴染みの関係があり、近所同士の支え合いが成り立っている地域では支え合いサービスの依頼が少ない。
- ・自分で運転出来るか、周りに支援者が居ないと住めない地域がある。
- ・地区社協の支え合いサービスについて、夏の草取りの依頼は大変で要望に答えられないこともあった。
- ・地域での支え合いはできているが、地域との交流がないと実態がわからない地区もある。

(2) 各圏域からの提言

- ・輪の中に入れていける方がいいが、他人との付き合いをすることが苦痛だという方、SOSを出さない独居の方が沢山いるため、どう対応したらよいのか懸念されている。
- ・担い手について、後継者がいないとの声が多い。
- ・地域での支え合い、担い手不足について、市や包括だけではなく、地区社協、自治会、民生委員、まちづくり協議会、その他の活動団体等と日ごろから連携をとって、地域の中で気になる方を支援していく仕組みづくりが必要である。
- ・認知症サポーター養成講座、声掛け訓練、出前講座等の開催を通じて見守り、支え合い等の啓発活動をしていく必要がある。
- ・公共施設を回る循環バスなどの仕組みがあるとよい。
- ・若い世代が地域の目を向けるきっかけになるような世代間交流が必要である。
- ・現役で仕事をしている方も、休日にお助け隊のように地域に出てもらい、地域に目を向けてもらう。
- ・若者（学生、PTA等）への積極的な声掛けが必要である。
- ・平日ではなく、休日のみ参加できる方へ広く募集をかける。
- ・自治会やお祭りなど、繋がりを大事にしていく。
- ・地域のことを良く知っている、世話焼きさん達をつなげていく事で、地域活動の層が厚くなる。

(3) 活動事例

①西志津地区社会福祉協議会

- ・コロナ禍で2年開催していなかった敬老ふれあいフェスタを開催。感染対策を施しての実施となり、模擬店は減ったが、その中には今までなかったPTAの方の参加があり、PTAと地域とのつながりができた。

- ・学生にも会場の手伝いや募金活動等をお願いしたところ、喜んで参加していただいた。
- ・今後は大学生にボランティア活動を知ってもらい、福祉活動に繋げていけるよう声掛けを計画している。
- ・自治会活動の班長は、仕事が忙しくても順番だから仕方ないと引き受ける。その中の何人かでもボランティア活動に興味を持って参加していただければと、継続して声を掛ける必要がある。仕事をしながらでも、ボランティア活動で出来ることはいくらでもある。主催者側が行動を起こさないと食いついてくれない。
- ・支え合いサービス等でも、協力者と利用者と分けて考えがちだが、支えられている人でも支える側に回れることが出来る、すべての人がお互い助け合える双方向が大事である。

②千成ふれあいサロン/千成ふれあいサービス

- ・自治会役員は1年交代の地区が多いと思うが、1年交代では何もしないまま終わってしまう。継続して続けるために、自治会の外郭団体、千成福祉委員会を立ち上げた。
- ・福祉委員会として、千成ふれあいサロン、千成ふれあいサービス、千成ふれあい体操を実施中であり、現在千成ふれあって元気の会を準備中である。これは、自治会の中に健康相談の様なものを立ち上げられないかと相談があり、月に何回か、自治会館で病院関係者が健康相談会を実施できるか検討中。
- ・今年度60代の男性が2人、手伝えることがあったら声を掛けてくださいと申し出があった。事業を継続していく中で、PRが町内にうまく伝わった結果であると思う。
- ・千成では各事業20名のスタッフがそれぞれいる。この人数を確保できる理由は、皆が望んでいること、皆がやってもらいたいことをやっているから。また、皆を集めた中で地域包括支援センターも説明会をやってきているからであり、一つの文化であると思う。

(4) 高齢者福祉課内での検討内容

- ・市で養成している、介護予防ボランティアの養成研修の中で地域の支え合い活動の周知や、担い手が必要とされていることを改めて伝え、登録の機会を増やす。
- ・65歳になると介護保険課から送付している介護保険証の中に、担い手の募集のお知らせを同封する。
- ・若い世代を含め、幅広い世代の一般の方が参加する市のイベントにて支え合い活動の紹介コーナーを設置し、周知を行う。
- ・介護予防ボランティアの計画的な育成

(5) 地域ケア推進会議からの提言

- ・ ボランティアポイント制を取り入れ、将来何か特典をつけることにより、参加する人を増やす取り組みをしてはどうか。
- ・ 企業はメリットがあれば答えてくれるため、企業にも声を掛けてはどうか。
- ・ 買い物や通院支援を望む方がいるが、公共交通機関では行きたい場所まで行けない、支え合いサービスで車両提供していただける施設の時間帯では合わない人がいる。車の確保は課題である。